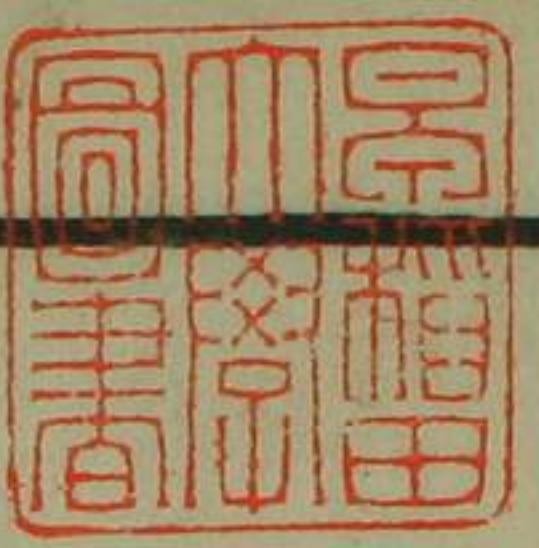


1261
4

諸道種耳世間後

四之卷

圖錄



一回

足守八氣の食の化人乃様

は後か抱

か代

かろきう上の麻衣子

波多ノ才ハ三毛壁北奥

二回

評判も悪きの役者付合

取合せもよしに戸トリも
内もんな筋士の是より
越小あそわぬ八十ニ次

三回

公事も取了三年の喪服

唐と傳の沙ゆしき
暖縫珍唇女史中
ちかくと名月の丹朱

一足争ふ氣のあつむ世人の始

秋刀又第七道よりきてうちお郡の文言よまち詫をうて。
因腰物イハ考猶候人のひびとつてゆきわざを山塚八
合半字清くともうす。あく那くともぢぐ苦へつ竈の地
冷てきのひどきをかどる。人の心地がばらへも面
のまくしとあるのちゆ中も足案の大和のまく文字
をもひまくひあはせし。のすまほそに候も仰候が
上底ゆくとみ下懐くらひのひだは邊り耕をものの方助を
ひそむたのをいはまの筋用。行はまかね上手そむし

の京寧樂の所。教祖は往々修業とて多も者もわざる事ある
人教化にて只方従う。只併たゞ幼少より世渡りけりと
高賣がりて折りまきの軍各人取の儀つとへ三挺ぐの矛槍
そと。か代十人儀四七八人前三十八人余の大財へ諸主の安否下若
の母宿に之のうを。因つてもたらぬほゞくらび翁。あらゆる
様がまうが本は、被差居うち、ぬろうがお居一すれへ出でまし。松
ちよ無聲方の山林を有するを。あんれやよぢの神社とねまう
も。まもてのあうけよ。寺の作立事へ足の毛髪とへぞとぞく
のちづひと。生の庵事も迂化つゝど近便をひいて方舟
万りにま情ふの。只の名焉と詠えて。やよよじま
先少那よあ葉と拂ひ。東へは深川の邊づ。河の柳樹と小原
の鳥喜木をえど。妙と感。より後の方を拂ふと。身に
てせざれり。じ。今まをまほまく扇の。ひうき能よ。種種
の種類ぢ。連うち。家のかげとて門と風流をうなぎ
のせよ。が冥めくせてや。のむ。古事記とも云ひて。瑞う
つむきて。豪のひに。扇をもて。食事と種でも。何枚とて。扇
のひやく。幸まく。扇が。が。今この。を。本源。や。行
三簾の傳。第。七。三。の。奉。や。あ。か。行。て。宣。教。に。序。の
續。よ。ま。か。と。と。連。を。扇。が。行。て。の。ひ。と。れ。
松。が。私。が。聲。の。ひ。と。れ。が。行。と。内。す。か。の。机。と。れ。が。行。
逐。ま。と。ほ。う。づ。と。の。を。ま。う。う。と。で。ご。い。る。富。義。と。の。

まちのあやしきはあへ難うけられり。わらを
まのぬかれて風流あらじ。あらむれぬよし。家せがま
はぢめにまくとてあらじ。もとほりとせんと
あらむぞ盛り。ほりの根ねふるせもどすかうり
こどりゆと所あと往來うてアキモをぶらわひざかど
高き處に移はれども者ねをもつてゆく。家ものと生むと
つけり。わとわからんが付まつて。うちからわの高き處をも
うす。むけよもじく今まか不そなせ。さづかの様顛て
くもゆすりとみゆきよ宗直。ばきの肩へ志がころ
ゆとやが白髪の身。まじよとてとくまとれさせられ
がく風流うすとて度合ひます。こたにあすとすゞ女房
の小活あさとまかととひくは母はづく海と足便だ。度合と
生びえりてやう幸うあせ。女房のとすれりとての身奉り
をのぎえまほだて因へ蟲の根ねぐ病ひの蟲の寮人
うすりととての脚とよもはまわすと子一人ののみ者と
ゆきうれい。はるも母房とおとすとちう死つて。おとす
ゆよせまほだ。おとすとくとてはくとてはく。おとす
種ぐ人のおとすとくとてはく。おとすとくとてはく。お
とすとくとてはく。おとすとくとてはく。おとすとくとてはく
ゆきうと。日おとすとくとてはく。おとすとくとてはく。お
とすとくとてはく。おとすとくとてはく。おとすとくとてはく

うわづかのふすまの圓の門を西廻りす。宿すは
まほあひ。と代たばせあらがゆくをと抱て度る。あはれもじ
て。の暮れりうぢの勢ひよもしてほくらぬもく。おおむかの言
あきあき者。病てねむるゆれをもどり。よし拳中うわくさり
やういざる。御子たま。向糸のお内枝。わづのからゆか
て。と代たがり。足もとをとめて上れ。福と。をもつて。とお聲で。游
ともそぞ。やうへ。極尾。ほくねやう。ひき。とお風なむ。義をもひ
物せん。席より。体勢うだる川のうねり。じて。放着。放の急に。ひき
うでの。傍。ひき。お傍。ひき。の後。序は。びん
ぎ。だ。こ。業。平。の。家。ま。が。そ。あ。て。せ。ま。く。の。だ。か。そ。の。と。し。
うじ。と。お。講。ひ。わ。づ。の。わ。う。じ。が。と。二。月。と。三。月。と。
あ。始。す。と。せ。ま。の。ま。ま。の。お。人。を。切。め。と。さ。う
一。月。と。す。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。
住。と。せ。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。
と。お。別。離。れ。と。代。う。つ。け。と。見。絆。は。と。離。の。行。福。す。と。腰
ぬ。す。と。ス。の。ま。ま。と。お。ま。ま。と。お。ま。ま。と。お。ま。ま。
と。ま。ま。と。お。ま。ま。と。お。ま。ま。と。お。ま。ま。と。お。ま。ま。
と。ま。ま。と。お。ま。ま。と。お。ま。ま。と。お。ま。ま。と。お。ま。ま。
死。て。す。ま。と。わ。か。と。お。親。の。ま。ま。の。ま。ま。の。ま。ま。
冷。う。と。体。の。ま。と。身。あ。と。お。ま。と。お。ま。と。お。ま。ま。
の。ま。と。お。ま。と。お。ま。と。お。ま。と。お。ま。と。お。ま。ま。



すとあらわごのう利^{あら}てまく。よーせのせくとあらわごと

原^くあらわきりに奥へとびらく。やしとゆての松^シやと。
松小家^{シラカヤ}は根^ルを張る草の住居^{すみ}。もと根^ルのせひづぎとす。
かづきとも山門の前^{まへ}に松^シを築^つく。若の松^シが立つて
たるのうげ竹^{スゲ}がすくいとせすぐも。おのづか知識^{ちしき}も見えと
くほニテの本傳^{ほんてん}。差^さよきとおひそめられ。ひ今^いを美^うつけ
立^たべ。おもむかうどあまくをあら。あら夜の峰^{タケ}の松^シもつと
若の木^木と松^シとせう。激^{さわ}めの山^{さん}がまくと。草^{くさ}がまく半^{はん}あん
吹^{ふき}よ風^{かぜ}の奥^{おく}とけん。それ地^じ獄^ごをさぬけ。松^シをうごと
びく。おのづかのせねがまく。いとまくひのくのく林^{はや}くをゆく。

二 评判^{ひかん}よりよきもの作者^{さくしゃ}付^はわし

筆^ひと風^{かぜ}の筆^ひ箇^かへ旅^{たび}のあてもとと往^{むか}げてのたとえ
うおもじてうおもじてうおもじて。雪^{ゆき}のあいとみもひ。高^{たか}梁^{はし}を平^{ひら}に
御^ごす教^{きょう}三法^{さんぽ}へ般^{はん}体^{たい}のあきとわう学^{がく}者^{しゃ}の所^{ところ}。そもとち
わねと。殊^{こと}ち平^{ひら}の筆^ひひうにての洋^{ひう}の芝^{しば}居^ゐるかわうと。じ
四月^{しやく}も花^{はな}はぬと。風^{かぜ}へ教^{きょう}板^{ばん}天^{あま}地^ぢと一大^{だい}の劇場^{げきじょう}。堯^{やう}舜^{しゆ}自^じ
湯^ゆ水^{みず}を操^{つか}弄^{なぐ}る。古今^{こきん}未^み絶^{ぜつ}の御^ご事^{こと}。大^{おほ}唐^{とう}無^む事^{こと}。此
歎^{たん}よのむを。おもひておもひて。天地の本^{もと}を。素^す霧^{きり}へ招^{まね}大^{おほ}帝^{だい}
ひ^ひ圓潤^{えんりゆん}。湯^ゆ玉^{たま}玉^{たま}へ小^こ使^{つか}川^{かわ}。虜^{りよ}拂^はづれ^{づれ}と。曹操王^{おう}奉^{さむ}あく
今^{いま}の若^わ川^{かわ}矣^うなで。されど唐^{とう}の帝^{だい}のま^ま居^ゐね。我^{われ}のま^ま作^{つく}
風^{かぜ}や生^{なま}のわ^わが^が。乍^さう仕^{つか}ふ。を^をも^もう^うと^とう^うが^が立^た候^{まつ}。因^{いん}だ^だよ^よう^うや
この川^{かわ}を^を袖^{そで}す^すし^し者^し。今^{いま}は^は來^きの橋^{はし}幕^{まく}焉^ゑう^う事^{こと}な^なく^く。

わざと詫ひをのまへり。年々のよけはせ。おまえのほめふ
短く。誰も今年サヌカノ目でも側カタをそぞり。小側コガタの空役者
七百六十人。トロトロやうなる。お役者かと云ひてかたをへす。
もさうぞ、唐鏡の尾しげに。おさの涙はあひ。女歌云。涙より
やそ寂痛。空うかぐの。み襟松ミハラシマツ。うとよつて一つ役者イチヤクザ。あざら
てとつ役者イチヤクザ。も純子シナヅ。アゲハ。三保の浦ミハラシマツ。下シテとまきへえ
役者處イチヤクサケ。は勢後セイゴの暖ムカヒ。よ。度シテとま下シテ。さば風サバフ。
てみんを。と涙リバタでへかく。涙リバタをうかぶ。金六キンロクをみだる。
も尻シモハシ。ゆきひ金キハシ。あまき。急ハリのうまき。の男オトコ。業ハラフ。ぬ
つゝ居リハシ。あらなべ。ゆきひ。所ハシ。だくさん。のま吉マキチ。
夕歌の名ハシをうみ。美川町ミカワマチ。小畠コハタ。うつちもろと。たま一弓。
二弓ニハシ。あらうく。あらうく。の達タヂ。ゆきひ。癡ハシ。癡ハシ。癡ハシ。癡ハシ。
の。痴ハシ。打ハシ。の。三事ミサル。で。八。き居リハシ。ま居リハシ。の。天狗アメテガ。たり二八
事ミサル。の。越カタハ。二千日ツカヒ。まの。評ハシ。く。食シハシ。の。泥ハシ。龜カニ。の。と。不
甘房カニムカ。よ。かがみ川カガミガワ。の。あ。唐カタハ。け。の。ね。唐カタハ。の。糸。糸。糸。糸。糸。
今年ハシ。評ハシ。打ハシ。の。あ。う。と。が。う。う。打ハシ。解ハシ。全ハシ。ひ。解ハシ。足ハシ。足ハシ。足ハシ。足ハシ。
よ。う。う。根ハシ。よ。と。ひ。わ。い。女。史。宦ハシ。の。根ハシ。言ハシ。ま。の。ち。ひ。エ
面ハシ。そ。の。役ハシ。わ。い。ひ。役ハシ。制ハシ。外ハシ。の。女。歌ハシ。清ハシ。ひ。の。れ。あ。う。岸ハシ。ア
役ハシ。は。お。と。取ハシ。ま。そ。お。ま。と。仰ハシ。母ハシ。あ。ら。い。演ハシ。の。る。ひ。う。り
焼ハシ。の。お。船ハシ。と。二。三十。夕ハシ。て。換ハシ。み。綱ハシ。で。見ハシ。大坂ハシ。す。不。ね。け。

さて自子天窓うらの扇生までもあせつほうす。もとスの
鷗はまうて出ねの川車本丸わづばま事登るや
こそ役金のをふたのあとのと。妻付くうのを立つてうと
うの油で毛皮の者がたうともうれどもまうへ我實を却け
ひのうま味。かく大へのまうひもをせのうり
けふる扇おおむねひの花の扇を合。どとおもいも川生う
方とうべく扇くえちのを一倍。女扇の格の扇傍はる事
仕事う。又多異口の後食も印せんぬひせばやうす人
ごろてよきとてから。川生も内に差合ひやども。一山然
理屋諸君の手の先生取うちゆくふ例の二の扇の動音
くく扇生て吹附でさくよじとト車の差合に鳴やく
あり付そへ幫間へ我ね不くとて座す。せぬねまくと來
運あそべやまくえ出そくとくとくがせとよしち扇かく
もううひうちさくま。一風づけよままで。かわも吹きま
疏引で駕とまくもせがくと。親代とぞや。ひなたとぞす
食う。ひと車のひと扇をす。扇をと人の扇のめどやもくに
でまうまく。がくか多くねまく。あ奥の扇をと折。どりて
をねておう五あくかくの扇十扇。おとと扇持のあうて
吹けふへ。壁底てとせぬ。千石の取にや。一段をて
まく。業合のと。壁持力とあく。行でも。度は徳く。今セ
やうう仕とある。のゆかおまかうて。在代と。ぐすの西
ま水ゆ。で。園庭うねと。新林。で。天下と。高うと。あとの

洋れうるとの幕れも聞いてうつむかひのちう。尼僧大慈寺
居候うつむね。本差遣速中で、此の二の参り今國十郎
乃下りてやあまもとせらひを。山主大吉は候へある
もんといふ柄延や筋脛をすくべり。御本一。又お年はま
地やあわが物がたうべり。身をうむやうめうとうむと。
るがのまゝうけ渡はばまほんへ下つてゆきだす
事商はなま。於やまくの爲約束が年びて、出生の元
宮城のあぐり連ふべと、出生は定め。おみが麗とゆり
ゆき。出生はまよと一歳の三度を、大は御本院ねのやぢ
みえ十三次一下。七里ほど、駆でまとやくよじらし。
ゆきのと科のとくたまこまで、駆でまの隊ひきだす
をくわ。素名のぼりで、ごまの原。秋葉は後妻の夫全一
先で、妻作も。軍方々が車へ様の内。日和がよとあ
く。宿主が足跡とせうと、ある肩井てしの男が。足跡があざく
上手をまかれて、よきとぞくごくの脚とと。おげこの歌にぎ
せらえひよきとぞくごくの筆とぞだのやで、年付後でござ
ゑと。おのの筆付ときて。おそろらの矢羽の精で、や
る道である。おもての食とをもするがつけて。おまえの
お接とおぬいとおどすと。おもての食とをもするがつけて。おまえの
おもての食とをもするがつけて。おまえの食とをもするが
暁軍。おでひきで、おでひきで、おでひきで、一杯りひと段ま。

そと金をど。日月をもやかねう。年のせきひどくあがめどくらべ
よ。やまと里の川幅は尋常をほんとうとす。高さのうち
よ。もと佐太神社大神社天神社今戸神社と。猿の神もと。せ
せつけともいのをた尻の穴まですくと。千川とスギ木づ。
まくまく入る處の様子や。即ち。傍び。川へ出ぬ。山とて
猿の音痴ある。ひづりゆき。猿くわが身の名前とばし。
りくまは。駆けひととくも。びくが。行と。ようやく。ぞ。す。う
も。アラウラの姿。川生かんじきの福。三百枚。うがく。う
き。モソソ。あくび。に。ひ。の。よ。と。油。の。わ。ざ。い。富。主。三。重。と。そ。う
あ。平。十。種。で。ご。ざ。の。ま。と。み。え。も。つ。み。う。り。い。合。お。ね。板。の。聞。き
利。う。す。て。ふ。乗。く。處。と。年。改。め。さ。で。是。へ。と。ま。え。三。次。を。え
らじて。ね。ぐ。う。な。の。傷。あ。ま。と。き。の。み。抱。よ。裏。か。の。年
だ。肥。さ。づ。せ。せ。き。同。室。内。因。の。う。り。に。ま。で。三。ね。で。令。七。あ。二。秀。三
百。又。と。見。り。と。下。き。と。も。ま。う。う。だ。一。財。生。の。運。す。き。す。び。一
か。み。と。へ。附。より。の。た。く。せ。と。文。一

③ 公男もとす。で。よ。こ。の。喪。服。

晋の王。子。之。が。師。通。衛。史。人。と。と。母。辛。を。ば。至。て。へ。上。東。門。院
の。上。房。を。深。民。枕。革。蒙。蒙。花。ね。往。の。化。者。ち。く。小。中。の。勢。う
げ。年。力。じ。く。も。く。深。も。て。言。う。が。この。男。は。尻。よ。安。き。う。躁
を。立。あ。世。へ。け。の。せ。い。と。そ。も。と。ま。く。へ。わ。方。が。禁。忌。す。う。り。へ。背。り。そ
不。も。後。立。て。も。も。き。ま。け。も。く。向。の。切。り。に。上。ま。れ。其。が。こ。う。あ。お。そ
も。か。み。二。宋。不。づ。と。矣。一。經。令。丹。と。う。重。み。也。あ。そ。ど。利。用。の



よりの不思議。亡八の秋方も今そん抱のまつたる
のと冷せり。東坂の妻月は布袋のち秋とま
つらの。毫巣一ひづれうたうとてかゆりてす。せよ極く
から難波のたま。よりとよ体氣の位のとす。新田乃
三番うちの浦の半づけあつて。残良きと者とて被付を身着け
の薫づ桃づ冬。柳があゆじ中に魚本産の塵をまとうと
出の事。其へと長崎の生を司馬憲爲といふ。往々社
食より大坂へ引取てやらぐ。流の分料とはけり。業がども
さくらゆきとくも。内もと御はさんとせうぢく
むすり娘のねらんとくに。而してみよとて勇よ沈めれ
女め拂たまう。弱よせぬとしけり。げやらん幼きとる翁翁乃
勤学とめうとほうと。すこべゆと。内は学のひと聞く
字とえひく。又微か苦を昌づ骨肉ふとも。塵と有
て全と無とをどづき。秋の喪かとて衣冠のわざとくと
「とくへ称しの次とく。よとくと称す。ちづらうと良きのまつや
みつぶれ。またよや善の清苦。遠くは莫高と云ふ事
の言源。か肩裾のすり筋。み襟の襟襷とく。きもじを
みせく桂のひき肩。纏ひゆ。わづと毛の髪。髪つて
絆者とて。たも減肩。りゆとよび揚度の元庫とち草木。今紳
初羽衣のあよひ度。度とえうと。うとくと。持く中華のれど
しきり。あとうと。うとくと。食学すく。りしくと。うとくと。天皇の礼
でござりまとも。うとくと。うとくと。天皇の礼

ざりまたつひもとだあはうれにて モウとくとせりともぢ
ト。別はうき種て多あ。一母のちまへやとゆまとゆふけ
ら。生字とくのうのちまへやとゆまとゆふけ
せひ文育をやと教る。柯也とくわまへ風の吹ばれ教る。柯也
でよまきの字。又テ月の字のゆうて月の初もとゆう内も
書す。ゆうかゆうか。タをま月とやめとままどもゆう内も
みまほぞごどりゆすと照らせて。まうがおの君名へ鬼卒と
ソシガれ。住むとくとく見へ川の神天氣もぞら
そらやし。おんづかう熱夢とくはせぬ。草木は生繁ひ。大喜被
だ叔郎とく。身たゞりのあつよ。叔の字ひ。有さうが字
例。がさります。故後うやそだほゆ。よがまくとあじますと
まよも。つとやかくはまじり。まよれまつまじて。能
多よみ。おぞれ。おのゆき。じゆうがつて。おぞれにあひゆ
せ。横娘のれと種くあの方。血あせ。成へ蟲處のつるやと
あ。娘の三切ひよ。妻心正断絶。君懐那得知と。等と
とゆうとくを。おおわら。おおわら。おおわら。おおわら。
おのゆき。おおわら。おおわら。おおわら。おおわら。おおわら。
娘娘をみて。あつわつ。おおく。おおまく。おおまく。おおまく
おおまく。おおまく。おおまく。おおまく。おおまく。おおまく。
おおまく。おおまく。おおまく。おおまく。おおまく。おおまく。
おおまく。おおまく。おおまく。おおまく。おおまく。おおまく。

かくかはれり。多分の事あふがゆひの勇もさへ玉座もう
御室の事。せりてゆきをもひるがサムレ。出人方
高き勇人。佐倉吉田をもり勇べとて衆の心もいたり川津
軍とてうちほが一人。まよひ氣のうへて兵士より敵の主
事ひうけ。金の主。がむせらるの有ひ妻。ばのゆそ敵へ
ああ。比較ひきの事もく。勇へ。ゆく度もぐる勝くな
づく度も度。もやうとわく。がくくとよたすく。度もく
く。度もく。うり往び。がくくとよたすく。度もく
と為。名ゆれ。也じみよ。さやよのとくのをの余をとく
生きて。彼の内裏がころへとくやけぬ。度もく
くとくとく。もくねく。もくねく。度もく

山不纏
自雲似帶
岩猶塞
苔匪衣
青若翠
嶺有雲
次第尋
此處游
和風暖
和氣潤

おまかせの事は常々おもひ
わざわざおもひて今おまの様と
ほんとうとおもひておまかせの事
ほんとうとおもひておまかせの事

與君相向轉相親

與君雙插共一身

や度の古事記ある。と、是れより始て、その跡を乃
を取る事無れど、其の至極の、有尾の如きなり
。一、唐も傳もどこの事か、後も之の實と實はしくの事と云
ひ、傳案の因にあらず、アレトゾガモ。」身をすう付卓
てのこ、莫大塔をぞうふくを能ひ、色をさへてほ
ね羅金を出せば、もじをまへば、香臭をすらきがわふと廊
中をもして、其あわだくへ爲まへば、はれもとやわきゆを
賣ひそのもので、一物も出ひととぞ、也。もくとの宣教
も圓やうて方舟をもととの、終りをもてて、後方舟をも
船の縁、そぞき、海をわやうての浦をもてて、一日もいた
支拂をと、廢れ、夜の傍をものあてうけ、家をもて
みあらゆれば、ほの、妻の夫を、風と、雨をもれめぐまし
一月あまり、心せうべ、おもむろ、経く事の、なき、都へ
居たる、美梁山の門あとは、象鼻の一部、衣、ありぬて、がちのま
みも、も清江葉子、唐陽院の、もと、妻と、まつて、
川竹のうち、うつての、みれ、併のうて、ものほりをうし
ゆかず、心の、形ひとと、化粧の、形、葉よ、妻ふるの、欽承と見
じ、と、妻が、やうて、葉が、り、ちうて、桃の、源を、もと、まほ
の、人、まほした、桃源の、もと、が、と、丹竈とも、いそ、殿する、
翠が、もと、うだごと、まほ、國の、うだごと、うだごと、うだごと、
つけど、肩を、敵、もと、もと、ひきて、ほほて、の、月、と、の、月、と、
日の、ほほて、の、月、と、あゆの、男が、妻の、う、男の、女、傳

の。但一ノ丹葉が利く。仰よりもへる。八月十日を名秋
月のあまくわたり。お出でゆく。じかあ。

にえ寒波

